ISAPH News Letter

アイサップ
ニュースレター

第17号

2014年2月25日発行

写真：ラオス　手洗い実習の風景

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

寄生虫感染対策プロジェクト実施報告

～住民の行動変容を目指して～

ISAPHラオス　**椋　清美**

現在、ラオス母子保健プロジェクトではISAPHの活動地区の１つであるカムアン県セバンファイ郡シーブンフアン地区ブンフアナー村ドンサワン集落（人口209名）で寄生虫感染予防対策を重点的に行っています。

これまで、シーブンフアン地区在住の70名前後の母親と子どもを対象として2009年と2011年に腸管寄生虫感染状況調査を行いました。いずれにおいても母親の感染率は80％を超えており、子どもの感染率も約40％と極めて高い感染状態であることが分かりました。腸管寄生虫に感染することは低栄養状態や貧血等を導く要因の１つであるため、腸管寄生虫感染予防対策は県や郡保健局をはじめ我々の課題の１つとなっていました。

こういった背景のなか、2012年７月にISAPHのカウンターパートである郡保健局と県保健局からISAPHへ腸管寄生虫感染予防対策実施の支援要請があげられました。ISAPHはその要請を受け、パイロット地区を設定し寄生虫に関する理解度調査、腸管寄生虫感染状況調査、駆虫剤投薬と駆虫効果の検討、衛生行動改善のための健康教育等を計画し、公益信託今井記念海外協力基金にご支援をいただき、2013年５月から寄生虫感染予防対策プロジェクトを実施しています。

【聞き取り調査】

2013年５月と2014年１月には寄生虫の種類や感染経路、予防方法についてどれくらい住民が理解しているかを１世帯につき１～３人を対象とした聞き取り調査を実施しました。この聞き取り調査によって、５月の時点では寄生虫予防方法や感染経路を理解・認識していない人たちが多くいましたが、今年の１月の再調査では、対象者の多くが前回の調査より理解度・認識度が高まっていました。このことは、郡保健局とISAPHが共にこのプロジェクト開始から毎月数回の健康教育を実施してきた成果だと考えられます。

駆虫薬を飲む子ども

【便検査による腸管寄生虫感染状況調査】

2013年５月と11月には、聖マリア病院国際事業部の山崎専門家がこのプロジェクトに合流し、郡保健局職員と共に対象集落で便検査を実施しました。便検査の結果から約70％の住民が何らかの寄生虫に感染していることが確認されました。特に経皮感染した後、小腸に寄生し吸血する鉤虫や川魚を生で食べることにより感染するタイ肝吸虫の虫卵を保有している住民が多くみられました。現在、寄生虫卵保有者へは駆虫剤投薬と駆虫効果の判定のため便検査を繰り返し行っています。

2013年５月と11月の感染状況は同様でしたが、聞き取り調査の結果から知識と認識度は少しずつ高まってきています。今後も引き続き、健康教育を繰り返し行うことによって住民の寄生虫予防に関わる衛生行動が徐々に変化することが期待されます。今回の寄生虫感染予防対策プロジェクトを実施するにあたり、助成金をいただきました公益信託今井記念海外協力基金の関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

聞き取り調査による理解度や認識度の確認

山崎専門家による便検査の様子

母子保健プロジェクト活動紹介

ISAPHラオス　田川　薫

衛生（食・飲・住）と手洗いについての健康教育

ラオス地域母子保健プロジェクトは、2005年５月にラオス政府とMOU（了解覚書）１を締結し、現在MOU3を迎えました。このプロジェクトは、カムアン県セバンファイ郡の３地区を対象とし、母子を中心とした住民の健康と栄養、衛生状況の向上を目標としています。

MOU1では、郡保健局と共にモバイルクリニックを立ち上げ、村の巡回診療を開始しました。モバイルクリニックでは、乳幼児の成長モニタリング、妊婦健診、健康教育、予防接種、医師による診療、家族計画を行っています。医療施設までのアクセスが困難であり、また医療サービス利用率が低いといった課題を抱えるラオスで、このモバイルクリニックは、住民の健康を大きく支えるものとなりました。

MOU2では、モバイルクリニックの運営をISAPH主体から郡保健局主体へ移行し、郡保健局による活動体制の強化、持続発展性を高めました。さらに、対象地区のうち１地区でビタミンB1欠乏症による乳児死亡が多いことが判明し、JICA草の根技術協力事業の協力を受け「生き生き健康村づくりプロジェクト」を実施しました。このことにより、乳児死亡や低体重児を減少させることができました。

そしてMOU3では、シーブンフアン地区以外の２地区でも同様の成果をあげるため、活動強化と技術の普及を行っています。また、住民が自分たちの健康に意欲的に取り組んでもらえるよう、村長や保健ボランティアに加えて女性同盟や郡と連携を図り、地域で取り組む住民の健康増進を目指しています。

これまでの成果として、低体重児の減少、ビタミンB1欠乏による乳幼児死亡の減少、妊婦健診受診率の増加、施設分娩率の増加などがあげられます。村の妊婦が妊婦健診を受診するようになり、妊娠・分娩に伴うリスクの予防と早期発見が可能となりました。安心して健康的に妊娠期を過ごし、より安全な分娩、そして健康的に子育てができるよう力を入れています。

また、モバイルクリニック参加率も年々増加しており、それに伴い、住民の行動変容が見られるようになりました。その１つとして、産後の母親の行動変容を紹介します。ラオスでは産後の伝統的なしきたりに“食物タブー”があります。これは産後のある一定期間、食べられる食材が限られていて、それ以外のものは産後の肥立ちに悪影響を及ぼす、不吉なことが起こるなどといった考えから食べません。この“食物タブー”によって栄養不良となり、産後の体力回復の遅れや体調不良の原因となることはもちろん、母乳を飲む児の栄養状態にも影響を及ぼします。そこでISAPHの健康教育手法を用いて、これまで集団健康教育や個別指導を行ってきました。また、長老への教育も行い、母親を取り囲む周囲への教育にも取り組みました。こういった活動によって、食物タブーを行う期間を短縮したり、制限する食物を減らすようになったという声を聞くようになりました。行動変容もISAPH の活動の大きな成果だと言えます。

住民が自分たちの健康を考えて生活していけるよう、これからも地域、郡保健局と協力し、サポートしていきたいと思います。

妊婦健診での血圧測定の様子

「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」進捗報告

ISAPH事務局　齋藤　智子

早いもので、プロジェクトが開始してすでに6カ月が過ぎました。前四半期には現地職員のアシスタント・チーフ・フィールドスタッフを雇用しました。マラウイでは高学歴でも職がない人が多く、短期の公募期間にも関わらず26人という多くの応募がありました。書類審査を通った11名を面接し、経験、熱意等を考慮し、大学で栄養を学んだ方を採用しました。若いですが、業務開始後、数ヵ月を経て自覚が芽生え、村の保健ボランティアの指導にも携われるようになりました。

プロジェクトの活動面では長く交流関係にあるムジンゲ村と、協力が期待されたチボプリラ村の2村をパイロットサイトとし、当プロジェクトの活動について村長と保健委員会へ説明しました。その後、各村でボランティアを選出し、また母親グループを組織しました。ボランティアは人口動態、成長モニタリング、栄養・衛生ボランティアの3種類で、母親グループのリーダーもボランティアとして協力してもらっています。人口動態ボランティアは妊婦登録から子どもの出生、死亡登録を行い、生まれてから5歳になるまで継続して成長を見守ること、成長モニタリング・ボランティアは子どもの成長を村レベルで把握すること、栄養・衛生ボランティアは子どもが十分な栄養を取れるよう母親に調理演習などを通して栄養教育をすること、母親グループのリーダーは活動が円滑に進むようプロジェクトと母親への橋渡し役として、それぞれが活動できるように計画しています。母親グループは5歳未満児を持つ母親の世帯10世帯で1グループとしました。母親グループ形成の目的は、プロジェクトの対象者である5歳未満児を持つ母親グループをプロジェクト活動の主体とすることにより、コミュニティーへのアクセスが容易となり、また、彼ら自身の村での活動のため、地の利による効果が期待できます。その他、受益者（母親）に直接裨益することができ、その家族、さらにはコミュニティーへの波及効果も期待できます。この母親グループは他の団体では「ケアグループモデル」と言っており、地域活動で成果をあげています。

ベースラインサーベイの結果をエディンゲニ・ヘルスセンター職員、ムジンバ保健局長及び環境衛生官、JICAマラウイ等に報告し、貴重なコメントをいただきました。たとえば、調査結果からProject Design Matrix（PDM）の指標の変更や追加調査などの検討が必要と指摘されました。今回の調査では2歳未満児の身体計測を実施した結果、発育阻害児率（年齢に対する身長が低い）が14.0%とマラウイ国の5歳未満児の発育阻害児率（46.0%、Multiple Indicator Cluster Survey 2006）より少なかったため、再度プロジェクトの核となる対象8村の5歳未満児を対象に測定児数も増やし身体計測をしました。その結果、発育阻害は2歳未満児平均で28.8%、5歳未満児平均では29.5%でした。保健省のカウンターパートとも協議を行い、これらの数値はマラウイ国の調査結果より低いですが、測定児数が300名以上あり、測定方法も適切で信頼できるデータであるため妥当な結果ではないかとのことでした。この結果をベースラインとする予定です。

最後に、当プロジェクトの対象地域を管轄する地域の長である「パラマウントチーフ」を表敬できました。「パラマウントチーフ」は世襲制のその地域の村長の頂点に立つ人で絶大な権力を持っています。面談したムベルワさんはマラウイでも有名な方で彼のおじいさんはマラウイのお札になっています。ムベルワさんにプロジェクトの説明をした折、協力の約束をしていただき、同行してくれたカウンターパートも興奮ぎみでした。

プロジェクトは走り出したばかりですが、スタッフ一同ゴールに向かって邁進する所存です。引き続き、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

パラマウントチーフ（左端）と

村人への活動説明

緑に染まる大地

ISAPHマラウイ　**岡本　愛**

雨上がりの虹

ムリ･ウリ？（現地語で“ご機嫌いかが？”という意味）日本では寒い日が続いていると聞きます。お体には十分御自愛ください。

さて、マラウイでは例年に比べて少し遅め（例年は11月半ばごろ）ではありますが、12月中旬から本格的な雨季に入りました。毎日のように雨が降っています。乾季のときは茶色だった大地が緑色に変わり雄大でとても綺麗です。今回はマラウイの大地を緑に染めているメイズ（とうもろこし）について少しお話させてください。マラウイの主食はシマといってメイズを粉にして練ったものです。これをデンデと呼ばれるおかず（野菜や豆、肉など）と一緒に食べます。マラウイの人たちはシマが大好きで「日本に行ってみたいけど日本ではシマが食べられないから行かない」と言うくらいです。

雨季が近くなるとマラウイの人たちにとっては1年で最も忙しい時期の始まりです。雨季に備え自分たちの主食であるシマの材料となるメイズを育てるため畑を耕し始めます。私には分からないですが、マラウイの人たちは気温の変化や風の吹き方などでもうすぐ雨季が始まるのが分かるそうです。自分たちの1年分の食料を確保するために耕す面積は広大で植える種の量は膨大です。みんな一家総出で働いています。この時期にこちらが村でなにか活動を計画したとしても村人の出席率は散々なものです。生活がかかっているのですから当然です。畑を耕したあとは時期を見計らって種を植え、肥料をやり、十分な雨が降ってくれることを祈りながらメイズの成長を待ちます。作物に水をやるということはしないので雨が十分に降らないと死活問題です。私も日本にいるときは雨の日が億劫でしたが、こちらで生活していると雨が降るとほっとします。逆に降らない日が続くととても心配になります。

メイズ畑で作業中の住民

マラウイでの生活は本当に自然に力をもらって生きているなと感じます。市場に並ぶ食べ物は季節によってまったく異なります。そのときに採れるものを食べます。もちろんそれ故に自然に左右され困難が生じることもしばしばですが、それがここの生活なのです。今年は今のところ雨が順調に降り続きメイズの収穫が期待できそうです。太陽と雨と大地からパワーを得て大きく育っていくメイズとともに、マラウイの人たちも彼ら自身の力で成長していってほしいと願っています。そして私たちの活動がその肥料の一粒にでもなれれば良いなと思います。

マラウイ 新スタッフの紹介

ジョン・ポール・バンダ

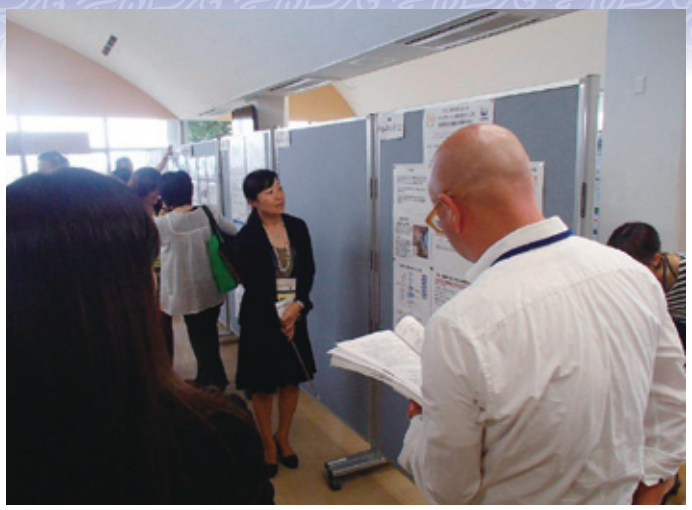
私はジョン・ポール・バンダです。ISAPHでチーフ・フィールドスタッフとして働いています。趣味は小説を読むこと、音楽を聴くこと、おしゃべり､バレーボールです。高校卒業後、専門学校で栄養と健康生活について学びました。子どもの成長モニタリングや栄養や衛生に関する教育を通して皆と協力し、子どもの発育阻害を減らしたいと思います。最後にマラウイを支援してくださっているISAPH、聖マリア病院に感謝いたします。また、ここで生活する私たち自身が栄養不良の問題と闘っていかなければならないと強く思います。

レインフォード・カマンガ

私はレインフォード･カマンガです。8人兄弟の5番目に生まれました。父は農業をしており、コーヒー豆などを育てていました。高校卒業後12年間、プロのドライバーとして働いてきました。私はキリスト教徒で日曜日には教会で説教を話します。神はすべてのものを創造し、私たちは神と共に生きています。アーメン。村人は、材料はあっても子どもへの適切な食事の与え方を知りません。このプロジェクトのおかげでこういった状況が改善することを願っています。プロジェクトエリアまでの道は未舗装の凸凹道ですが、楽しんでいます。

日本国際保健医療学会に参加して

ISAPHラオス　**椋　清美**



ポスターセッションの様子

2013年11月2、3日に沖縄県名護市の名桜大学で開催された第28回日本国際保健医療学会学術大会へ参加しました。この学会は、国際保健に関わる教育・研究を通じて国際協力の促進と人材育成を行う学術団体で、会員は大学・研究機関・国際機関・病院・NPOの職員や、大学院生、学部生等です。

今回の学会ではISAPHの活動地区の1つであるカムアン県セバンファイ郡シーブンフアン地区ブンフアナー村ドンサワン集落（人口209名）で実施している寄生虫感染対策活動で得られた結果や問題点の一部を「ラオス農村部におけるメベンダゾール単回投与による腸管寄生虫駆虫効果の検討」と題してポスターセッションで報告しました。

寄生虫感染予防対策の活動の1つとして、土壌伝搬腸管寄生虫感染者へは、WHOやラオス国家寄生虫対策にも明記されているようにメベンダゾール(500mg)の単回投与により治療を行っています。しかし、治療薬を投与しても駆虫しきれなかった症例や慢性的に鉤虫に感染している症例も否定できなかったため、今回の発表を通して今後の対応策等に役立つ情報収集を行うことも兼ねての参加でした。発表後は、数名の先生方から今後の治療方針のアドバイスや対象地区以外での寄生虫感染状況に関するご意見をいただくことができました。

今回の発表を通して得たアドバイスやご意見を元に今後の治療方針についてカムアン県保健局、セバンファイ郡保健局とともに検討し、安全でより効果的な治療を地域住民へ提供できるよう今後も活動を行っていきたいと思います。

国際協力フェスタ「地球市民どんたく2013」に参加して

ISAPH事務局　**磯　東一郎**

ISAPHと聖マリア病院の活動紹介ブース

福岡国際交流協会主催の国際協力フェスタ「地球市民どんたく2013」が、福岡の天神アクロスにおいて11月9日、10日に開催されました。このフェスタにはJICA九州国際センターをはじめ、国際協力の分野で活躍する19団体が参加し、ISAPHも聖マリア病院国際事業部のご協力により、聖マリア病院との合同で初参加することになり、活動紹介のブースを確保していただきました。福岡県最大のイベント会場であるアクロスには、国際協力に興味をもつ多くの方が来場され、各ブースを訪ねて海外での活動の話や各国の文化習慣などについて熱心に耳を傾けていました。スタンプラリーを楽しみながら各ブースを駆け回る子どもの姿も多く、珍しい国の名前や写真、そして民芸品や民族衣装に目を丸くしている姿が印象的でした。

私たちのブースには、2日間で約250名の方にお越しいただきました。多くの方にISAPHと聖マリア病院の国際協力活動について話を聞いていただいたことで、より国際協力や開発途上国に興味を持ってくださる方が増えることを期待しています。

最後のイベントとして炭坑節の盆踊りがありました。留学生などの外国人らも参加し、みんなの笑顔で国際フェスタを締めくくったあたりは、福岡ならではの味わいが感じられ、参加団体が主体となって実施した手作りの心のこもった「おもてなし」を実感した一幕でした。

ラオス赴任のご挨拶

ISAPHラオス　**田川　薫**

子どもたちに手洗い指導をする田川職員

はじめまして。このたび、ISAPHラオス事務所にフィールドマネージャーとして赴任いたしました田川薫と申します。2013年1月まで、JICA青年海外協力隊で助産師としてラオスにて活動してまいりました。再びラオスに赴任することができ、大変嬉しく思っております。協力隊では、ISAPH事務所のあるタケク県の南隣のサワナケット県病院に配属され、病棟での活動や小中学校での健康教育を行ってきました。ラオスの人たちと共に過ごしてきたことによって、知り得たラオスの現状、ラオスの人たち。その中でも特に、知る機会、学ぶ機会の大切さを実感しました。ラオスでは、知る機会、学ぶ機会が非常に限られており、また人によってその差が非常に激しいです。ささいなことやどんな小さなことでも、知っているか、知らないかで、大きく左右します。そういった情報を提供できる、機会を与えることのできる環境が必要だと思います。

ISAPHは地域に根ざし、直接住民に健康教育や母子保健活動を行うことで、住民の健康増進ならびに地域保健の向上を図るという、長年積み上げてきた実績があります。ラオスの母子保健に少しでも貢献できるよう、精一杯努めて参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

マラウイの食生活

ISAPHマラウイ（インターン）　**西谷　純**

子どもたちに囲まれて

はじめまして。2013年12月よりマラウイの「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」にインターンシップとして参加させていただくことになりました西谷純と申します。現在、大学在学中で栄養学を専攻しております。このような貴重な機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。

街中のレストランではどこも同様のメニュー、同様の味付けと聞いていましたが、マラウイに来て本当にその通りだと思いました。また各家庭でも毎日の料理にバリエーションはあまりないようです。経済面や食物へのアクセスに問題があると思っていましたが、聞くところによると同じメニューの方が落ち着くという理由もあり、普段と異なる料理はなかなか受け入れられにくいそうです。日本人にとっての朝食のようなものなのでしょうか。日本人は朝食が毎日トーストとコーヒー、ごはんとみそ汁でもあまり飽きないのと似たような感覚なのかもしれません。しかしこれが毎日3食とも続くとなるとやはり栄養が偏り、健康に影響が及ぶことは言うまでもありません。

問題や解決策を共有し、子どもの栄養状態を改善するために職員の皆様とマラウイの人々が共に活動する様子を間近で学び、道ですれ違うと陽気に声をかけてくれるマラウイアンとのコミュニケーションを大切にしながら取り組んでまいりたいと思います。よろしくお願いいたします。

iサイクルより寄付をいただきました

ISAPH事務局

平成25年9月～12月までのペットボトルキャップ収益として、iサイクルより39,955円（キャップ799,120個分）の寄付をいただきました。ありがとうございました。

iサイクル　オフィシャル・ホームページ
http://www.st-mary-med.or.jp/icycle/

最近のできごと　2013年9月～12月

9月 1日～ 7日	【ラオス】聖マリア学院大学・保健医療経営大学スタディツアー受け入れ
9月13日	【ラオス】プロジェクト中間評価会を開催
10月 5日・6日	グローバルフェスタJAPAN2013（東京）参加
10月 7日	【マラウイ】ムジンゲ村にて村長及び保健委員会等へ活動内容を説明、プロジェクト活動開始
10月 8日	【マラウイ】パラマウントチーフのムベルワ氏を表敬訪問
10月10日	【マラウイ】チボプリラ村にて村長及び保健委員会等へ活動内容を説明、プロジェクト活動開始
10月14日	【ラオス】田川薫氏をフィールドマネージャーとして派遣
10月15日・16日	【ラオス】ラオス保健フォーラム（ビエンチャン）参加
11月 2日・3日	日本国際保健医療学会（沖縄）参加
11月 9日・10日	地球市民どんたく2013（福岡）参加
11月14日～12月20日	【ラオス】聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏を寄生虫プロジェクト実施のため派遣
11月22日	【ラオス】寄生虫プロジェクト健康フェア開催
12月11日	【マラウイ】西谷純氏をインターンとして派遣
12月24日・26日	【ラオス】NPO法人じゃっどスタディツアー受け入れ

ISAPHの役員名簿

役　職	氏　名	備　考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理　事	深見　保正	元福岡県企業管理者
理　事	湯川　　武	早稲田大学イスラーム地域研究機構　招聘研究員
理　事	浦部　大策	聖マリア病院国際事業部
理　事	江藤　秀顕	神山復生病院
監　事	竹之下 義弘	弁護士（東京六本木法律特許事務所）

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員　年会費：30,000円

一般会員　年会費：3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、当東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

【振込先】
郵便振込　口座名　特定非営利活動法人ISAPH
口座番号　00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH　東京事務所
〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2　新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188　FAX.03-3593-0165
E-mail　tokyojimusho@isaph.jp
URL　http://isaph.jp/

東京事務所案内図

【ISAPHニュースレター　第17号　編集スタッフ】
石原 潤子／磯 東一郎

社会医療法人
雪の聖母会
聖マリア病院

理事長：井手義雄　病院長：島 弘志
〒830-8543　福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322㈹　FAX.0942-34-3115
URL　http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative（赤ちゃんにやさしい病院）WHO・ユニセフ指定
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.6.0）
- 総合周産期母子医療センター（NICU・MFICU）
- 福岡県救命救急センター
- 地域医療支援病院
- がん診療連携拠点病院
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 日韓医療技術協力指定病院
- 自動車事故対策機構療護施設
- ISO 9001認証施設
- ISO 15189認定施設
- 福岡県肝疾患専門医療機関

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。